

◎参加者全員を当事者にする「地域円卓会議」の企画・運営

| | | | |
|-------|--|-------|------------|
| No.07 | 国頭村における木育推進拠点形成活動を対象とした地域円卓会議を通じた支援（H25） | | |
| 実施主体 | 公益財団法人みらいファンド沖縄 | 実施市町村 | 沖縄県 国頭村 |

◎事業の背景

沖縄本島北部は「やんばる（山原）」と呼ばれており、丘陵地しかない中南部と比べると比較的高い山並が続き、河川のある地域である。沖縄本島の森林面積は 65,819ha であるが、うち 79.9%がこの北部にある（農林業センサス 2010）。中南部では、第二次世界大戦時の消失、その後の乱伐、林業の衰退等の理由で森林面積が少なく、自然と触れ合える場所が少ない。

沖縄本島の最北端に位置する国頭村は、面積は 194.82 平方 km でその 84.0%が森林で占められている。人口 5,188 人（h22 国勢調査）で、人口流出、少子高齢化が進んでいる。国頭村は古来、首里城建築の際も材を納めた木材の産地であったが、近年は生産量が減少している。平成 23 年の林業産出額は 5 億 5 千万円であったが、そのうち木材は 2 千万円程度しかない。平成 10 年頃までは木材だけで年間 1 億円を超える産出額があった（生産林業所得統計）ことから、急速な衰退を見せていると言えよう。

こうした状況を受け、森林業及び森林文化の保全・振興に関する取り組みが行われている。例えば、林野庁「木の文化を支える森づくり活動」の一環として「首里城古事の森」が設定された。イヌマキなどの首里城建築に用いられた木を、国有林の一角に植樹することを平成 20 年からはじめており、琉球王朝時代より、木造建築やフクギ並木、漆器、三線など独自に育まれて来た「木の文化」を後世に伝えるための取り組みが行われている。

また、国頭村の山林野は希少生物の宝庫でもあり、ヤンバルクイナやノグチゲラなどが生息していることでも知られている。国頭村では「環境保全型観光」を宣言し、「やんばる学びの森」の整備や、「森林セラピー基地・ロード」の認定を受けるなど、森林資源を活かした観光コンテンツ作りに取り組んでいる。

環境省那覇自然環境事務所がやんばるの国定公園化をめざした取り組みを行っているが、その一環として平成 19～20 年度に「やんばる地域の自然資源を活用した観光のあり方検討調査」を実施した。その中で国頭村の観光客はおよそ 45.5 万人と推計しており、その大半が宿泊を伴わない「立ち寄り型」であり、かつ辺戸岬などの無料の施設を利用することが多く、村内での消費に結びつかないケースが多いことを指摘している。

「やんばる森のおもちゃ美術館」を通じ、木の良さをあらためて知ってもらい、木の需要を増やし、産業や観光の振興に繋がることを、国頭村では期待している。この館の運営については「沖縄振興特別推進（市町村）交付金」（いわゆる一括交付金）によって平成 29 年度までは最低限の予算が確保される予定である。しかし、人材育成や森林業への理解浸透には長期に渡る取り組みが必要であり、一括交付金終了後もこの館の運営を維持継続していく体制を、地域内外の多様な人々によって担われる体制を含め、長期的視野をもって構築する必要がある。そのための、地域内の人々どうし、そして地域外の人々との対話の機会が求められている。

◎事業の概要

当団体は、県内の NPO 等公益活動団体を支援するため、寄付や社会貢献活動の振興に取り組んできた。また地域円卓会議の手法で、県内の様々な分野・地域における、セクターを超える対話の場作りを支援してきており、そこからいくつかの協働事例も生まれている。これらのノウハウを用いて、この国頭村の「木育」の取り組みを支援するのが、本事業である。

事業 1. 国頭村の「木育」とその発信拠点の持続可能性を考える地域円卓会議の開催

地域円卓会議を 3 回開催することを通じた地域内外の対話の促進と館の持続可能な運営に向けた担い手の顕在化に取り組んだ。のべ 22 名が着席者として議論を交わし、また東京おもちゃ美術館が

全国の情報提供をし、議論に参加した。

第1回テーマ：森とともに生きる国頭村から発信する「木育」

第2回テーマ：国頭村から発信していく「木育」をどこに届けていくか？

第3回テーマ：やんばるの森林資源を使って守るため「木育」をどう広げていくか？

事業2. 「やんばる木育基金」の設置・運営の検討

館の運営支援を含む、木育推進活動の継続をめざした、「寄付型基金」の設置検討をし、東京おもちゃ美術館の協力によるクラウドファンディングを活用した資金調達の実地体験を行った。

○ステークホルダーへのヒアリング

○「寄付型基金」の提案

○クラウドファンディングを用いての寄付募集体験

| ステークホルダー | 役割 |
|------------------------|---|
| ①公益財団法人みらいファンド沖縄 | 事業全体の企画・運営、協力先との調整・連携 |
| ②認定 NPO 法人 日本グッド・トイ委員会 | 木育、ファンドレイズ等に関する情報提供、円卓会議着席者の選定における助言、やんばるおもちゃ美術館運営・イベント開催等の支援 |
| ③国頭村役場 | やんばるおもちゃ美術館の運営 |
| ④国頭村森林組合 | 国頭村森林公園の指定管理 |

(1) 中間支援の特徴（取組の中で見られた工夫や取組が上手く進んだポイント等）

●…中間支援における特徴的な工夫

●…中間支援における失敗と対応

実施中（平成25年度）

●実りある話し合いを実現するための参加者の選定（キャストイング）

地域円卓会議を開催するにあたっては、会議内容が建設的であり、次のステップにつながる事が重要であることから、会議に出席する人材の選定と、十分な意見交換が必要となる。そのため、まずは今回の円卓会議開催の依頼者である国頭村役場と森林組合へのヒアリングを通じて、会議でテーマ（課題）とすべき内容について話し合いを行い、お互いの理解を深めながらテーマを設定した（本事業では、「木育」の浸透や美術館の持続可能な運営方法を考える場と設定）。

設定したテーマ（課題）について、中心メンバーとなる森林組合、国頭村役場、県の他に、協力を得られそうな人材（「木育」の推進に関する専門家や「木育」推進に対して前向きなアイデアを出してくれそうな人材、具体的な協力が得られる可能性の高い人材等）を選定し、センターメンバーを決定し（本事業では、商業施設事業者、旅行業者、NPO、メディア等を選定）、意見交換によってお互いの考え方等も共有を図った。

これにより、円卓会議でどのような人材がいてどのような発言が成されるのかをある程度把握できるとともに、建設的で次につながりやすい議論が展開できた。

●参加者全員に当事者意識を芽生えさせる「地域円卓会議」

公開型のグループインタビューとワークショップを組み合わせたような当団体独自の手法である「地域円卓会議」では、事実の積み上げとそれに基づくアイデアや提案等で議論を深める構成となっており、プロセスが進むごとに、円卓に座っている出席者（センターメンバー）だけでなく、その後ろに座る関係者（サブメンバー）やさらにその後ろの傍聴者（一般参加者）にも関わりを求める構成

になっている。特に会議が盛り上がるのは「サブセッション」で、ここではセンターメンバー、サブメンバー、一般参加者が一緒になり、3～5名のグループをつくり、情報提供やセッション1で共有された課題の解決に向けて活発な意見交換が行われる。そして、「セッション2」で話し合った結果を発表し合い、多くのヒントや方向性を得て会議は終了となる。

また、特徴的なのは、会議結果が、ファシリテーショングラフィックという手法を用いてリアルタイムに記録されていく点である。これにより、参加者全員の円滑な情報共有が可能となる。

このような、参加型の会議のプロセスを経ることで、参加者全てに当事者意識や主体性を醸成させるとともに、出席者間の関係構築にもつながった。

| No | プロセス | 内容 |
|----|---------------|---|
| 1 | 論点提供及び情報提供 | 主催者（国頭村役場、森林組合）あるいはそれを代弁する者が、地域の課題について会場全体に投げかけることから始める。 その後、司会者が主催者に対して質問を重ねて、地域の実情や抱えている課題等について答えてもらう（人口、高齢化率、産業構造等の客観的なデータやあまり知られていない地域の歴史等）。 |
| 2 | セッション1 | 各センターメンバーが会場に集まった参加者に対して、自身の経歴、仕事内容等を紹介しながら、「論点提供」で提示された課題に対する質問や意見・提案、あるいは自身が取り組んでいる関連した活動等について話す。 |
| 3 | サブセッション（兼 休憩） | 地域の課題や実情がある程度会場内で共有されたところで休憩を交えたワークとなる。センターメンバーとサブメンバー、会場参加者全員で3～5名程度の小グループを作り、司会者から出されるワークテーマについて話し合う。話し合った結果を、意見やアイデア、質問として出してもらう。 |
| 4 | セッション2 | 「サブセッション」で出された「質問」「アイデア」を紹介しながら、再びセンターメンバーで議論をする。最後に議論全体を振り返って会議は終了。 |



サブセッションの様子



ファシリテーショングラフィック

●寄付を受ける体験が自立的な運営に向けた意識の高まりに寄与

おもちゃ美術館の運営を担う森林組合（支援対象）に自立的な運営への意識を高めてもらうことを目的として、クラウドファンディングによる資金調達でおもちゃ美術館のおもちゃを購入する費用を調達した。寄付で資金を調達できたという体験が、今後の自立的な運営に生かされることが期待される。

(2) 取組の変遷

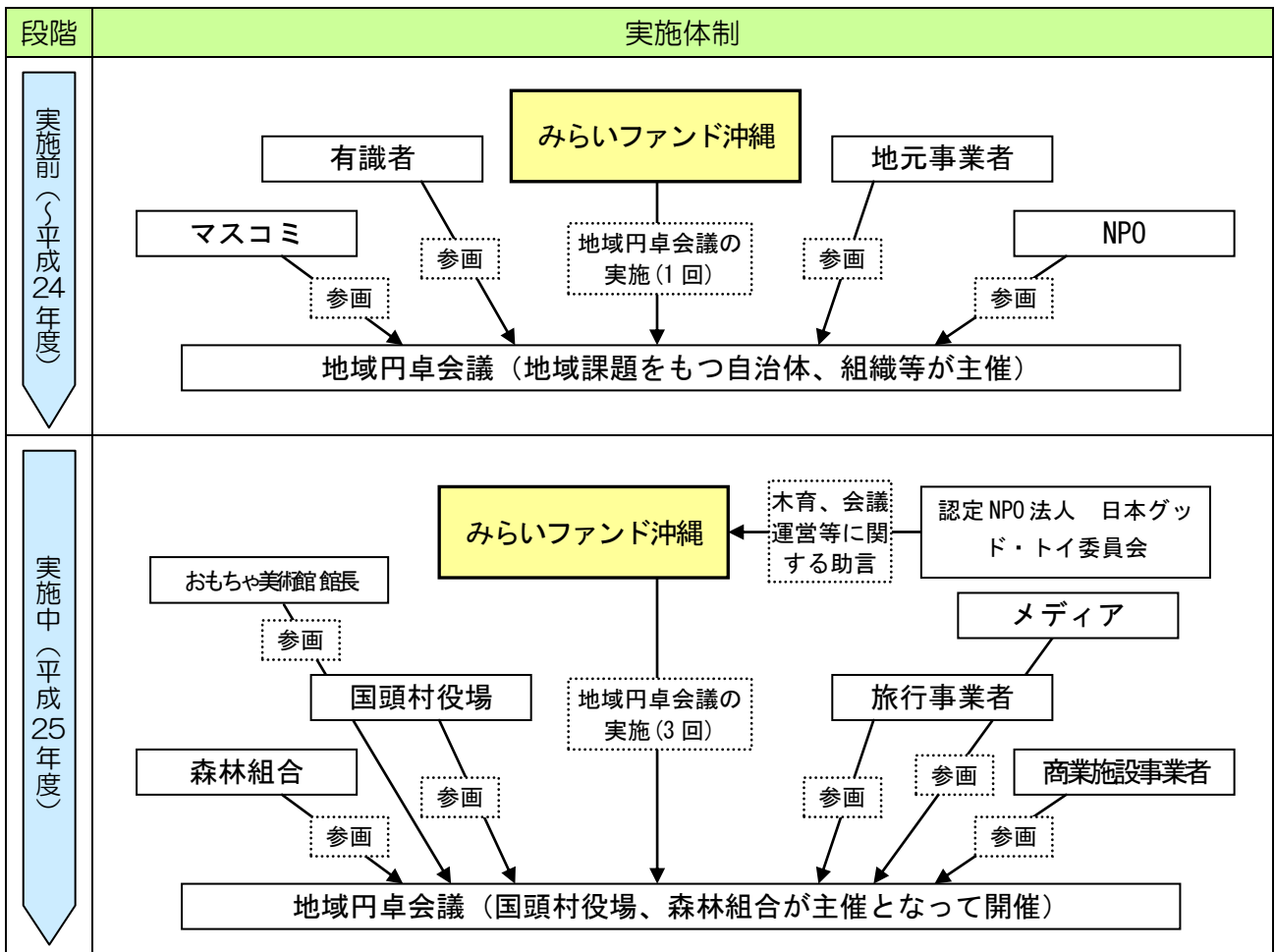
※表中青字下線部の内容は「(1) 中間支援の特徴」で詳述

| | 主な課題 | 対応・工夫 | 効果・成果 |
|-------------|---|--|--|
| 実施前（平成24年度） | <p>○多様な地域課題への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域に存在する様々な課題の解決に向けて、多様な主体の参画を進めることが必要。 | <p>○地域円卓会議の実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の課題をテーマとして、ステークホルダーを集めて意見交換をする「地域円卓会議」の取組を平成23年より開始。 ・十数回の実績を有する。 | <p>○積み重ねによるノウハウの築盛</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域円卓会議の実践の積み重ねによって、会議の進め方やポイント等に関するノウハウやスキルが蓄積された。 |
| 実施中（平成25年度） | <p>○「木育：推進とおもちゃ美術館の持続可能な運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「木育」の浸透や美術館の持続可能な運営方法を考えることが今後の大きなテーマとして共有された。 | <p>○地域円卓会議の実践①（キャストイング）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会議のテーマを、「木育」の浸透や美術館の持続可能な運営方法を考える場と設定し、設定したテーマ（課題）について、中心メンバーとなる森林組合、国頭村役場、県の他に、協力を得られそうな人材（「木育」の推進に関する専門家や「木育」推進に対して前向きなアイデアを出してくれそうな人材、具体的な協力が得られる可能性の高い人材等）を選定し、センターメンバーを決定し、意見交換によってお互いの考え方も共有を図った。 | <p>○建設的な議論のための人材が選定された</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これにより、円卓会議でどのような人材がいてどのような発言が成されるのかをある程度把握できるとともに、建設的で次につながりやすい議論が展開できた。 |
| | <p>○多様な主体の参画促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題の実現に向けては、様々な関係者の協力が必要であり、そのような関係者の会議への積極的な参加が重要であった。 | <p>○地域円卓会議の実践②（会議運営）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開型のグループインタビューとワークショップを組み合わせたような独自の手法である「地域円卓会議」では、事実の積み上げとそれに基づくアイデアや提案等で議論を深める構成となっており、プロセスが進むごとに、円卓に座っている出席者（センターメンバー）だけでなく、その後ろに座る関係者（サブメンバー）やさらにその後ろの傍聴者（一般参加者）にも関わりを求める構成になっている。特に会議が盛り上がる「サブセッション」での意見交換を通じて、参加者全員が前のめりになり、多くのヒントや方向性を共有して会議は終了となる。 ・会議の内容を常にファシリテーショングラフィックの手法で記録することも、円滑な情報共有に寄与。 | <p>○取組の周知や関係者のネットワークに寄与</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1～2回を国頭村、第3回を那覇市で開催し、「木育」推進やおもちゃ美術館に関する一定の周知を図るとともに、関係者のネットワークやファンづくりのきっかけとなった。 |
| | <p>○自立的な運営への意識醸成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業の課題認識を踏まえ、若い世代の参加が前提であったため、若い世代に特化した参加促進が課題であった。 | <p>○クラウドファンディングの実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既に起業・創業している人材10名ほどに参加してもらえるように調整し、プロジェクト実現に向けてゼミナールをけん引する参加者を確保した。 | <p>○ひとつの成功体験に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・起業・創業を経験する参加者が加わったことで、アクションプラン実現に向けた話し合いを活性化させることに寄与した。 |

(3) 実施体制の変遷

平成 25 年度モデル事業に取り組む以前より、みらいファンド沖縄では、地域課題の解決に向けてステークホルダーを巻き込んでいく「地域円卓会議」に取り組んできた。そこで蓄積されたノウハウや知見等を生かすとともに、1 回限りの開催では課題解決の具体的なアクションに結びつきにくいことが課題としてあったことから、本年度事業では、始めて全 3 回の連続性のある「地域円卓会議」として開催された。

「おもちゃ美術館」の運営を担う森林組合と関係する国頭村役場が主催となった会議で、「木育」がテーマであったことから、木育の推進やファンドレイジング、おもちゃ美術館の企画・運営等に詳しい「認定 NPO 法人 日本グッド・トイ委員会」の協力を得て、行われた。



(4) 成果と課題

(事業の成果)

◎「やんばる森のおもちゃ美術館」の運営を含めた「木育」の方向性と課題の共有

美術館の開館の目的が、地場産業である林業の振興であることを、森林組合や国頭村役場を始め、村内のステークホルダーと共有できた。また、美術館の運営については、村内外の巻き込みが不足していることが分かり、今後はボランティアの組織化・仕組みづくりに着手する方向で合意された。

◎地域コミュニティの関係性の再構築に有効

今回の地域性の強いエリアを対象とした地域円卓会議では、土着的なつながりの強い地域の関係性を一度解きほぐして、関係性の再構築を図るのに非常に有効であることが分かった。

◎連続性のある地域円卓会議（全3回）の開催がステークホルダーの意識改革に寄与

3回の連続性を持たせた構成としたことで、1度では議論しきれなかったこと、また発言の中で出てきた重要なキーワードを掘り下げることができた。また、こうしたオフィシャルな場での議論に慣れない人たちにとっては、段階を踏んで経験を積むことで、外側への意識が育まれ、参加したステークホルダーの意識改革に一定の寄与ができた。

(事業の課題)

◎地域のペースに寄り添うバランス力の必要性

本事業では、取組の主体がなかなか見えてこないことで事業が大きく遅れた経緯がある。美術館がオープンしたことで、関係者の関心や期待が高まってはいたものの、閉鎖的な地域社会の中では、なかなか前に出ようとする人材が現れなかった（おもちゃ美術館の館長も未定）。

地域の信頼を得ながら関与していくためには、地域のスピード感に寄り添い、地域内の人間関係を把握し、関係性を育てていくというバランス感覚が必要となる。

その上で、根気強い対応と、少しずつ成果を積上げることで理解を広げていくことが求められる。

(5) 今後の展望

◎基金設置に向けた試験的取組

成功体験を提供する目的で、平成26年6月から6ヵ月間で、実験的に基金を設置する計画がある。平成26年6月15日に、日本グッド・トイ委員会が琉球大学医学部と協働で、「ホスピタル・キャラバン」に関するフォーラムを琉球大学で開催するが、この日をキックオフとして寄付募集を行う。その後、日本グッド・トイ委員会、みらいファンド沖縄、村内有志で設置する基金を、次年度中に行う。本事業で試験的に行ったクラウドファンディング「ヤンバルクイナ（の木片）を国頭に連れていこう」のようなストーリー性があり共感を育みやすい「参加のデザイン」を大切にしながら、寄付型と購入型を併用してファンドレイズできるような仕組みを検討している。

◎みらいファンド沖縄の自立的な支援の継続

みらいファンド沖縄が、資金調達の協力者を募り、それを通じて県内での「木育」の共感者を増やしていく役割を担っていくことを考えている。試験的な取組を経て、実際に基金の設置ができれば、基金運営手数料を活用して持続可能な支援活動体制に移行することが可能になる。

また、他地域においても基金の設置・運営を展開していくことで、組織そのものの安定化も期待できる。

◎日本グッド・トイ委員会の継続的な支援

本事業の協力機関である日本グッド・トイ委員会は、東京おもちゃ美術館として、「やんばる森のおもちゃ美術館」との姉妹館協定を結んだ。このことから、今後も継続して国頭村の「木育」に対して、物的・人的な支援を継続していく。特にボランティアマネジメントのノウハウの提供、具体的には「おもちゃ学芸員制度」とそれにとまなう学芸員養成講座を、国頭村と協働して開催していく予定である。